

# 南の国の「ナデシコ」税理士

成功へのキセキ

## 第14回 屋台で泥だらけのラーメンを食べる

ミナミの国に会社をつくってから、2年、月に一度、ミナミの島と日本を往復する生活をしています。「大変ですねー。」  
たいていの時から、こう言われます。

たしかに、もう若くないので(汗)、身体への負担がないといえば、ウソになります。フライトの翌朝など、とくに重いものを持った覚えもないのに、腰が痛くてベッドから起き上がれなかったり…。疲労の蓄積は移動距離に比例する、自覚はなくても相当疲れているのだと、いつもお世話になっている整体師さんにも言われました。

それでも、どうやら私は生まれながら、丈夫な身体を授かっているようです。とくに、健康や食事に気をつけている訳ではないので、これは生んでくれた両親に感謝するしかありません。

ミャンマーのような途上国は、水質が悪いので、お腹をこわす人が多いのですが、私は、この2年間、一度もお腹をこわしたことがありません。お腹に自信のない人は、ホテルでも水道水を使わず、ペットボトルの水で歯を磨くのだそうです。

私はというと、さすがに生の水は飲みませんが、生野菜もバリバリ食べますし、氷入りの生ジュースも平気で飲みます。屋台での食事については、自分なりのルールを決めています。柱の太いテントのお店はOKだけど、ビーチパラソルのような柱の細いお店はNGというものです(笑)。

あるとき、郊外の工場地帯に出張に行きました。食事のできる場所かというと、泥にまみれたテント、そして地面に置かれた小さなテーブルとイス。もちろん英語は通じません。メニューもなく、食べるマネをすると、ホケホケ(ミャンマー語で、OKという意味)と、土の上に置かれたキッチンで何やらゴソゴソ作り始めました。何をしているかと思うと、インスタントラーメンの袋を破って、お湯を注ごうとしています。

ちょっと待って！せめてきれいなラーメン・ボウルで食べたい！

という訳で、ラーメンを入れる前に、持参したウェット・ティッシュで、ボウルを拭きます。ウェット・ティッシュは、真っ黒というほどではありませんが、やや土色

に(汗)。  
飲め、と勧められた、ポットのお茶も、ちょっと躊躇しましたが、周りにいた数人のミャンマー人ワーカーが美味しそうに飲んでいるのにつられて、ゴクゴク。すると、このメイド・イン・タイのトムヤムクン(風)？ラーメンが、めっちゃ美味ではありませんか！スープもすっきり、平らげてしまいました。

この話をミャンマーに駐在している日本人にすると、全員から、まさか！信じられないと言われます。確かに、この国にいる間に肝炎になったり、腸チフスにかかったりする駐在員も多いので、無茶をしてはいけませんが、ミャンマー人も、日本人も同じ人間。彼らが美味しく食べているものなら、私も試してみたいと思うのです。

ダウンタウンに行くと、ローカルのレストランがあり、名前はわかりませんが、ここはスープ仕立ての魚料理が、本当に美味しいです。このお店の場合、店舗自体はビルの一角にあるのですが、狭い店内にテーブルはなく、夕方になると、道路にプラスチックのイスとテーブルを広げるだけ。フランスのカフェだって、歩道にテーブルを並べて、外で食事するでしょ？あれとスタイルは同じです。まー、お酒落度を比べるのも申し訳ない話ですが(笑)。

せっかくミャンマーに来たのだから、ローカルの人と同じものを着て、同じものを食べ、同じ感情を共有したいなーというのが、私の考えなのです。けれど、このローカルのお店と一緒にしてくれる日本人は、ほとんどいません。

ミャンマーは、治安のよいことでも知られています。犯罪発生率は、じつは日本より低いのだそうです。

どこの国に進出するかを決めるとき、治安の良し悪しは、とても重要なポイントです。ミャンマーに会社をつくる前に、カンボジアやバングラディッシュなども検討したのですが、一番の決め手は、なんといっても治安でした。ヨーロッパなど一部の先進国を除けば、ミャンマーは、夜女性が一人でタクシーに乗れる数少ない国ではないかと思えます。実際、私も飲み会のあと、タクシーを拾って、ホテルまで一人で帰ることはよくあります。

とはいえ、さすがに日本で夜中に乗るときほど、リラックスはできません。日本だと疲れて、車内で眠ってしま

## ◆筆者 原 尚美 (はら なおみ) プロフィール

税理士。東京外国語大学卒業。TACの全日本簿練(現:全国公開模試)「財務諸表論」「法人税法」を全国1位の成績で、税理士試験に合格。直後に出産。育児と両立させるため、1日3時間だけの会計事務所からスタートし、現在は全員女性だけのスタッフ30名、一部上場企業の子会社やグローバル企業の日本子会社などをクライアントにもつ。ミャンマーに会計サービスの会社を設立し、海外進出支援にも力を入れている。著書に「小さな会社のための総務・経理の仕事がわかる本」「小さな起業のファイナンス」(いずれもソーテック社)、『51の質問に答えるだけですぐできる「事業計画書」のつくり方(日本実業出版社)』『トコトわかる株式会社のつくり方(新星出版社)』『世界一ラクにできる確定申告(技術評論社)』『一生食っていくための土業の営業術(中経出版)』など。その他、「経理ウーマン」「デイの経営と運営」など雑誌への寄稿や、商工会議所、中小企業投資育成株式会社、日本政策金融公庫などでの、セミナー実績も多数。

うことも度々ありますが、ミャンマーではちゃんと両目を開けて、反対方向に曲がったりしないかと緊張しています。

ミャンマーのタクシーは、日本のようにメーターがついていません。なので、乗る前に料金交渉をします。外国人とみると、ふっかけられるので、自分で目的地までのルートや距離感をつかんでおき、適正料金をこちらで提示しなければなりません。つまり、ヤンゴン市内の地図を、大体は頭にいれておかないと、安心してタクシーに乗ることもできないのです。

けれど、大手と言われる日本企業の多くは、ローカルのタクシーを使いません。自社でドライバーを雇ったり、ドライバー付きの車をレンタル会社から借りるのが一般的です。上場企業ともなると、誘拐の心配などもあるので、本社サイドから見れば、当然のリスクマネジメントでしょう。

結果、大手企業や政府系の駐在員は、警備員のいるレジデンスに住み、玄関口でお迎えのハイヤーに乗って、クーラーの効いたオフィスビルと往復するだけという生活になりがちです。どこかに出かける時も、行先を告げれば、相手の会社の入り口まで、ドライバーが連れていってくれます。

そのため、2～3年ヤンゴンに住んでいても、道路の名前も覚えられないし、街角の美味しい屋台の味も知らないという大手企業の駐在員は珍しくありません。

でも、せっかくミナミの国に来たのだから、私はもっ

ともっと、この国を味わいたいと思っています。「お客様」としてこの国に来たのではなく、ともにこの国の発展に寄与することができたら、いいなと。何か一つでも、私がこの国に来て、がむしゃらに働いた足跡を残せたら…と楽しい夢を見ている。



屋台のラーメン屋さん

中小企業は資金力に乏しいためか、1～2年で撤退する会社も、少なくありません。海外進出に成功する会社と、うまくいかない会社はどこが違うのでしょうか？

その差は、その国に対するリスペクトの気持ちがあるかないかで決まるのではないかと思います。アジアビジネスには、日本では予想もしなかった困難が、たくさん待っています。単に儲かりそうとか、人件費が安いからという理由で進出した会社は、ひとつでも思い通りにいかないと、頑張るモチベーションがわいてきません。

その国を愛し、その国の国民と一緒に成長しようという気持ち、ほかのどの国でもないその国でなければならぬという熱い想い。

そういう想いのある経営者が、時間はかかっても結果を出せると確信しています。

好評  
発売中

51の質問に答えるだけですぐできる  
「事業計画書」のつくり方

原 尚美 著(日本実業出版社) 1,600円+税

51の質問に順番に答えるだけで、会計やマーケティングの知識がなくても、簡単に事業計画書ができる本。

『ソイ・マヨ』という大豆マヨネーズの事業計画をモデルに示して説明しているので、具体的な考え方やつくり方のイメージがつかめます。

これから起業しようという方、新規事業を始めたい方に大いに役立ちます。

